

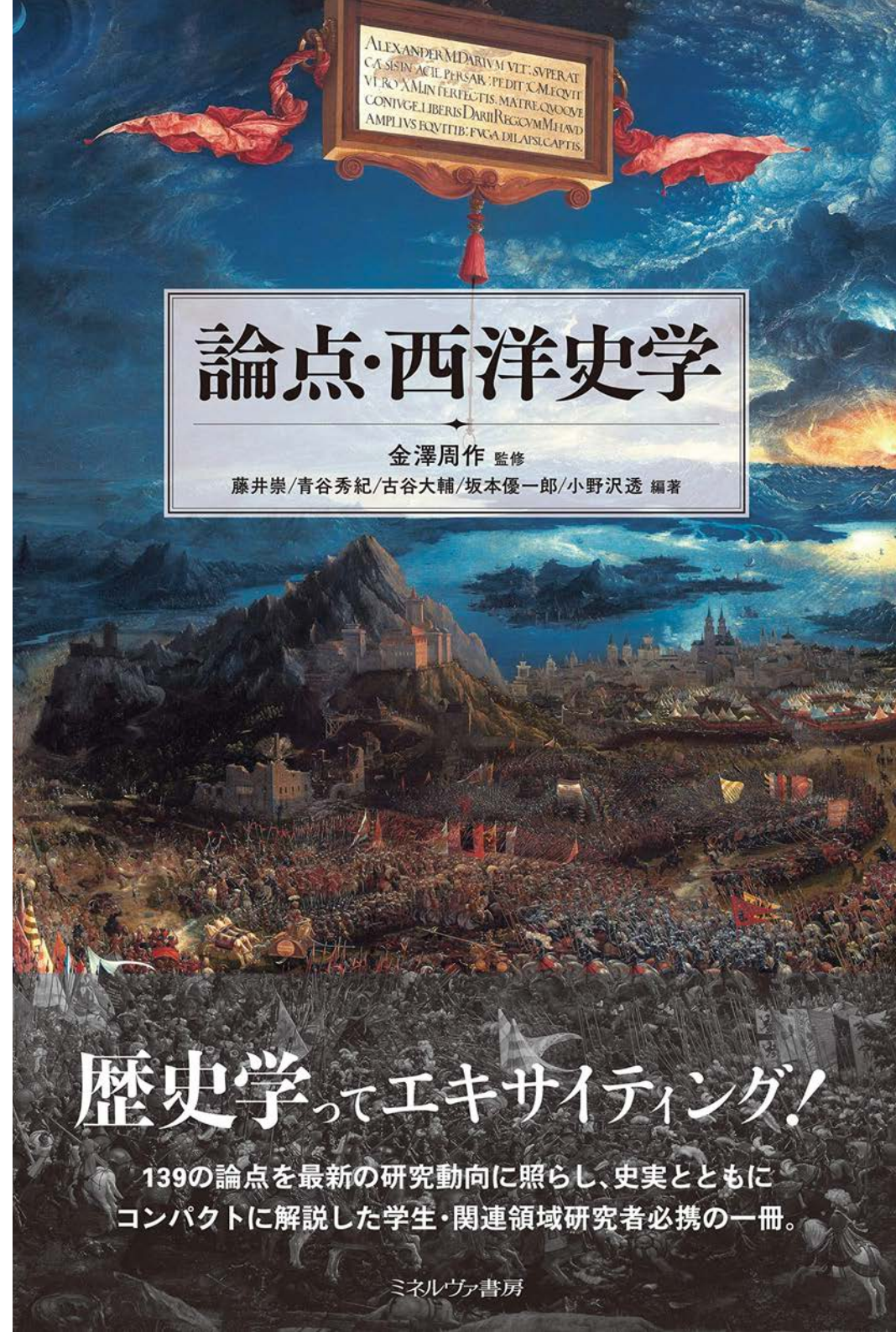
リンネ博物学から見る近世の日欧関係

西洋史研究と日本史研究の接続

大阪大学大学院言語文化研究科 古谷大輔

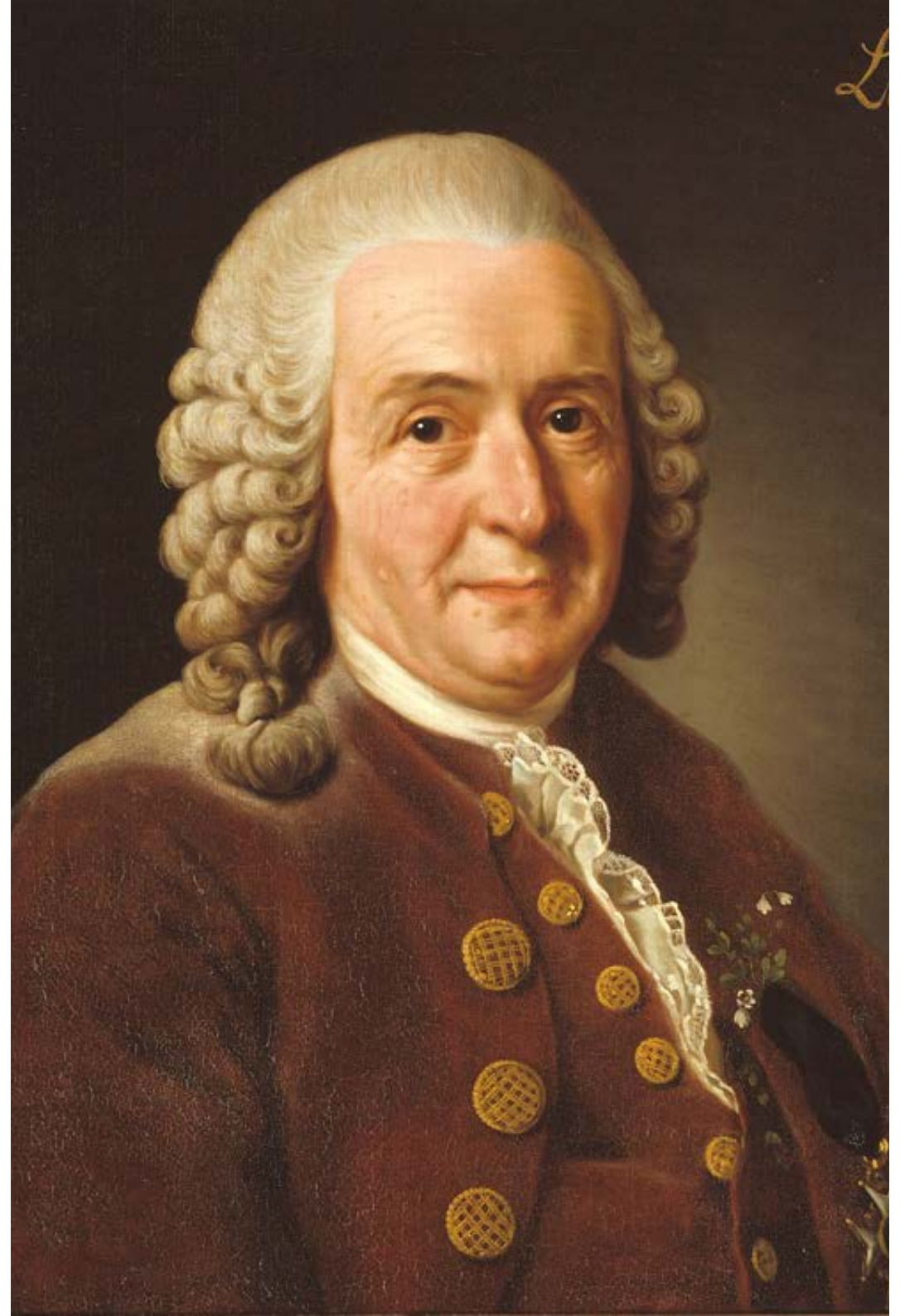
「痛みから学びへ」：僕が痛風体験を通じてウップサーラ大学で出会った問題

- ・ 僕の専門はスウェーデンを対象とした近世ヨーロッパの国家形成論...著書に『論点・西洋史学』（ミネルヴァ書房、2020年）『礫岩のようなヨーロッパ』（山川出版社、2016年）、『歴史的ヨーロッパの政治社会』（山川出版社、2008年）など
- ・ 2001年大阪外国語大学講師、2005年同助教授、2007年大阪大学世界言語研究センター准教授、2012年より現職...スウェーデン王国ルンド大学歴史学部客員研究員（2000-01年、2013年）、同ウップサーラ大学神学部客員研究員（2009年）などを歴任
- ・ この講義は、ウップサーラ大学への派遣中（2009年）に僕を襲ったはじめての痛風（スウェーデン語ではgikt）発作からはじまる...博物学で有名なC.v.リンネ（リネー1707-78年）による『Ölに関する記述』（1749年）との出会い→「日本人たちが米から作るöl（穀物原料の醸造酒）はとてもよく醸されて強いが、痛風と結石を引き起こす」
- ・ 僕がウップサーラ大学で「なぜ18世紀のスウェーデン人が日本のことに詳しいのだろうか？」という問題に出会った...①「鎖国」とは一体何だったのか？、②なぜオランダ人ではなくスウェーデン人だったのか？、③スウェーデン人の知識を求めた日本側・ヨーロッパ側の事情は何だったのか？



この講義で語りたいこと①：西洋史と日本史をつなぐにはエティックな視線が必要ではないか？

- ・ 「なぜ18世紀のスウェーデン人が日本のことに詳しいのだろうか？」...問題①を調べれば「鎖国」概念に隠蔽されてきた18世紀頃の東西ユーラシアの「関係」がわかるだろう、問題②を調べれば学問の観点から18世紀頃のヨーロッパの独特な姿がわかるだろう、問題③を調べれば18世紀頃の東西ユーラシアが各々直面していた事情の「比較」ができるだろう
- ・ この講義における西洋史研究と日本史研究の位置づけ...イーミックな視点から各々の地域の構造に対応した「近世」の意味（複数形の個性ある「近世」）を見いだすことに有効な方法 cf. emic...言語学研究から提唱された「特定の文明圏に関与する意味を見いだす視点」→問題②は、18世紀頃のヨーロッパにおける学問の観点からスウェーデンがもったイーミックな意味を明らかにするだろう
- ・ 西洋史学研究と日本史学研究の接続はいかにして可能だろうか？...各々の文明圏がもつイーミックな意味（複数形の個性ある「近世」）をつなぎあわせる世界がもつエティックな意味（単数形の「近世」）を探究することで両者を接続できるのでは？ cf. etic...第三者の観点から「複数の文明圏に通底する意味を見いだす視点」→これが複数の文明間の「関係」と「比較」を探究するグローバルヒストリー研究に僕たちが学ぶ理由だ



この講義で語りたいこと②：エティッ クな視線は「関係」と「比較」を考 えることで求められるのではないか？

- ・ グローバルヒストリー研究は僕の問題にエティックな意味を与えてくれそうだ...eg. 僕はK. ポメランツ「大分岐」論などを参考に演繹的発想（三段論法）で以下のような推論を立てた
- ・ ①大前提「人口圧と資源限界に共に直面していた東西ユーラシアのうち、ヨーロッパが石炭・鉄などの産業への応用やアメリカ大陸など世界諸地域の資源への活用を始めることで両者の「大分岐」が起きた」→②小前提「人口圧と資源限界に直面していたスウェーデンでは、社会的有用性をもった資源探索のための新たな方法論（リンネ博物学）が生み出された」→③推論「スウェーデンは社会的有用性をもった資源の情報独占という点から東西ユーラシアの「大分岐」に関与した」
- ・ 僕はヨーロッパの辺境に位置する地域（スウェーデン）を研究しているが、この推論がエティックな意味をもった議論として説得力をもてば、地域史を研究する魅力がこれまでにない視点から増すはず...そのためには関係・イーミック・比較のそれぞれの視点に立った検証が必要だ
- ・ そのためには小前提の検証が大事となってくる...小前提の検証①「18世紀頃のスウェーデン人の学術活動はどんなものだったか？」→これは東西ユーラシアの「関係」の検証である、検証②「スウェーデンに特徴的な学術活動が育まれた背景は何か？」→これはイーミックな視点に立ったスウェーデンないしヨーロッパの検証である、③「18世紀頃のスウェーデン人の学術活動がヨーロッパ側・日本側で求められた背景は何か？」→これは東西ユーラシアの「比較」の検証である

【参考文献】 K.ポメランツ『大分岐—中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成』（2015年、名古屋大学出版会）

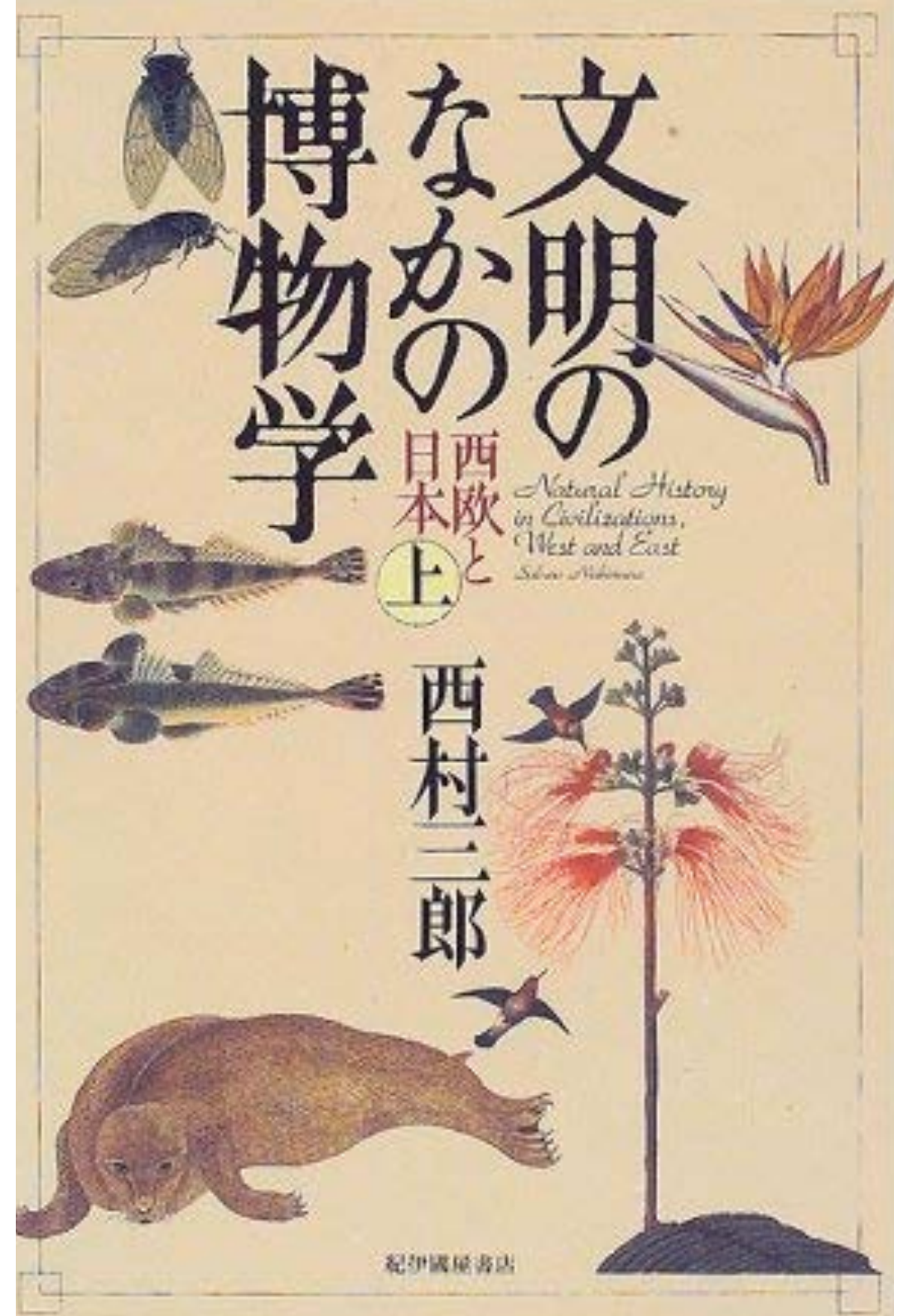


名古屋大学出版会

18世紀スウェーデンの学術活動とは？①：「鎖国」に隠されてきた東西ユーラシアの関係を知る

- ・ 「出島三学者」を知っていますか？...18世紀頃の日本におけるヨーロッパ受容の変化（→後述）①江戸幕府の漢訳洋書の輸入緩和（1720）、②18世紀後半以降の蘭学の発展
- ・ 日本におけるヨーロッパ理解とヨーロッパにおける日本理解の架け橋となった三人の博物学者...E.ケンペル（1651-1716, 訪日1690-92）、C.P.テューンバリ（1743-1828, スウェーデン生まれで世界中に派遣された「リンネの使徒」のひとり, オランダ東インド会社の医師, 帰国後はウップサーラ大学医学部教授、同大学総長, スウェーデン王立科学アカデミー会長などを歴任, 訪日1775-76）、P.F.vonシーボルト（1796-1866, 訪日1823-29. 1859-62）
- ・ 「出島三学者」には共通点がある...①オランダ東インド会社の医師として来日、②医学と博物学の知識をもつ、③非オランダ出身者（ケンペルとテューンバリはスウェーデンのウップサーラ大学で学ぶ）→オランダ通詞や蘭学者との交流（オランダ語・西洋医学の伝授）を通じて日本における「蘭学」の発展を刺激する一方、そこで得られた日本事情をヨーロッパへ紹介 cf. テューンバリ→吉雄耕牛→大槻玄沢→中天游・宇田川玄真→緒方洪庵

【参考文献】西村三郎、『文明のなかの博物学—西欧と日本—』
上・下、1999年、紀伊國屋書店



18世紀スウェーデンの学術活動とは？②：チューンバリの事績からリンネ博物学の特徴を知る

- ・ 「出島三学者」のうちケンペルとチューンバリはウップサーラ大学で学んでいる...①18世紀のウップサーラ大学では医学部でリンネ博物学が育まれていた、②博物学は人類が産み出せすことのできない自然界の万物を描き出す学問であり、薬剤の必要から医師にも求められた知識だった
- ・ リンネ博物学は分類法（自然の三界（植物界・動物界・鉱物界）を網・目・属および種によって体系的に整理）と二名法（自然の文物を普遍的に配置するラテン語と、現地の生活様態に即した個性を記す現地語とで命名）で、今日の僕たちの自然理解のフォーマット（あるいは自然界を可視化する方法）にもなっている
- ・ チューンバリにみるリンネ博物学の特徴...①ヨーロッパにない動物・植物・鉱物を記録する、②社会的に有用な資源かどうかは現地の生活でどのように使われているか知る必要がある（→ヨーロッパ各国の学術団体や特権商事会社に求められたプラントラントハンターに必要な方法）、③日本の社会や文化に関しても記録し「旅行記」にまとめる cf. 日本語・スウェーデン語の語彙集まで作成（→資源の社会的有用性は現地の生活を観察するフィールドワークから見いだす）

【参考文献】 C.P.ツェンペリー『江戸参府随行記』（1994年、平凡社）



18世紀スウェーデンの学術活動とは？③：ヨーロッパと日本との「媒介者」となったスウェーデンを知る

- ・ ウップサーラ大学はヨーロッパ諸国の世界探索にリンネ博物学の知見をもったプラントハンターを供給した eg.イングランドの世界進出を支えたリンネ博物学：J.クック（1728-79）の南太平洋探検と「イングランド博物学の父」J.バンクス（1743-1820）を支えた「リンネの使徒」D.ソーランドル（1733-82）
- ・ テューンバリの日本情報は高い評価を得て、イングランドやロシアの日本進出を刺激...例 E.ラクスマン（1737-96, スウェーデン時代のフィンランド出身、シベリア探検を評価されロシア帝室科学アカデミー会員として活躍）と大黒屋光太夫（1751-1828）→大黒屋光太夫がイルクーツクでラクスマンと出会った際（1789）、すでにラクスマンはテューンバリを介して二人の蘭学者（中川淳庵（1739-1786）と桂川甫周（1751-1809）の情報を知っていた...大黒屋光太夫らの送還を建前としたロシアの日本への通商要求→初代ロシア遣日使節A.ラクスマン（1766-1806頃）の訪日（1792）...テューンバリの薦めで中川淳庵と桂川甫周宛てに書簡→桂川甫周による光太夫の尋問（『漂民御覧之記』、『北槎聞略』）→ウップサーラ大学を介して日本の情報はユーラシア大陸を一巡する
- ・ テューンバリと交流をもった学者らにがオランダ語を道具とした総合学としての蘭学を発展→今日に引き継がれる学問の伝統：蘭学から洋学、洋学から外国研究へ 例 蛮書和解御用（1811, 江戸幕府の翻訳機関、大槻玄沢や彼の門下生が翻訳官として活躍）→蕃書調所（1856, 江戸幕府の洋学研究機関（語学・化学・工学・理学・数学・芸術など））→開成所（1863）→東京大学（1877）の一部へ

【参考文献】木崎良平『光太夫とラクスマン 幕末日露交渉史の一側面』（1992年、刀水書房）

光太夫とラクスマン

幕末日露交渉史の一側面

木崎良平



刀水書房

リンネ博物学がスウェーデンで育まれた背景とは？：①「礫岩のような国家」に生きる

- ・ 近世ヨーロッパにみられた「礫岩のような国家」...①「公共善」の実現を建前に特定の君主（→日本史で言う「天下人」や「公儀」のイメージに近い）が命令権（→今日で言う「主権」の源流にあたる権力のひとつ）を行使しながら、法や慣習が異なるさまざまな政体とそこに住む住民の権利を安堵することで、「礫岩」のようにひとつに束ねられる複合君主政→②「礫岩のような国家」は19世紀以降、ひとつの主権国家として統合の度合いを高めたか、あるいは複数の主権国家に分裂したため、今日の領域国家の枠組みを過去に遡らせても捉え難い
- ・ 「バルト海帝国」を知っていますか？...①バルト海周辺に広がる様々な政体がスウェーデン王の保護下に「礫岩」のように寄り集まった圏域、②スウェーデン王は現地に認められてきた法や慣習、権利などの存続を保証するが、法や制度、権利、信仰、言語などは統一されない cf. 「バルト海帝国」に生きた人の国家観... O.E. ヴィルマン（1623頃-73頃、スウェーデン生まれ、オランダ東インド会社の砲艦士官として訪日1651-52）の日本観（皇帝（≒天下人）に従う多くの王や諸侯がいる君主国（「政宗王国」や「駿河王国」などからなる連合体）
- ・ スウェーデン人もフィンランド人もエストニア人もデンマーク人もドイツ人も...スウェーデン君主のもとに共和する国家（「君主支配の共和的統治」（I. カント））...①19世紀に国籍概念ができる前の国家では「○○人」という発想が意味をなさない、②「自然権」の発想が普及する以前のヨーロッパでは、住民の権利は身分や地域によって平等ではない、③住民の権利は出生地ではなく、職業や能力によって認められる→出生地が違って、自らの職能を発揮でき権利を保障される国家のもとで生きる
- ・ eg. テューンバリの例...①パリ留学の学資の目処がたたずオランダ東インド会社入社（1771）、②ケープ植民地で現地調査しながらオランダ語を習得（1771-75：オランダでの医者・博物学者としての評価）、③バタヴィア経由で日本に滞在（1775-76）、④イングランドを経由してスウェーデンへ帰国（1777-79：イングランドやスウェーデンでの博物学者としての評価）

礫岩のようなヨーロッパ

古谷大輔

Furuya Daisuke

近藤和彦

Kondo Kazuhiko

編

A Europe of
Conglomerate Politics

山川出版社

【参考文献】 古谷大輔・近藤和彦編『礫岩のようなヨーロッパ』（2016年、山川出版社）

リンネ博物学がスウェーデンで育まれた背景とは？②「礫岩のような国家」を束ねる

- ・ 近世のバルト海周辺地域に生きた人びとは、自らの権利の安堵という観点から「保護者として最適な君主は誰か」複数の君主を天秤にかけていた...リヴォニア戦争（1558-83）、三十年戦争（1618-48）、北方戦争（1655-61）、大北方戦争（1700-21）など→ハプスブルク君主国、ポーランド・リトアニア共和国、デンマーク君主国（デンマーク王を天下人とするデンマーク、ノルウェー、シュレスヴィッヒ、ホルシュタインの連合体）、ロシア帝国との間の保護者の地位をめぐる争い
- ・ バルト海周辺地域の人びとからみた保護者としての君主の信用は、自らの生活圏を守護する軍事的実力と異なる出生地を包括する普遍的世界観が大事だった...「バルト海帝国」の例：ヨーロッパ文明ゴート起源説（ヨーロッパ文明はゲルマン民族の大移動でヨーロッパ各地に痕跡を残したゴート族に起源があり、スウェーデン王国はゴート族の末裔である） cf. O. リュドベック d.ä. 『アトランティカ』（1679-79）→「ローマ」とは異なるもうひとつの「普遍ヨーロッパ」を説明するフィクション
- ・ フィクションを正当化するためには「学問」の創造が必要だった...ウップサーラ大学における考古学・文献学・博物学の発展→スウェーデンと世界諸地域との間で自然や風俗などを比較し、スウェーデンの特殊性を証明しようとする→ウップサーラ大学は「世界を可視化する」諸学の拠点として情報を集積...現地の自然資源だけでなくフィールドワークで風俗や文化も観察するリンネ博物学の登場

【参考文献】 O. Rudbeck d.ä., G. Eriksson red., *Atlantica naturalhistoria. En antologi*, Stockholm, 1998.



この講義をまとめよう①：リンネ博物学が東西ユーラシアで求められた事情とは？

- ・「コロンブス交換」から「マルサスの罠」へ...①コロンブス交換（15世紀末以降の東半球・西半球間の植物、動物、食物、人口などの交換）→食糧事情の改善と人口増加、②マルサスの罠（「人口は幾何級数的に増加するが、食糧は算術級数的にしか増加しない」T.R.マルサス（1766-1834）『人口論』（1798）の言葉）→人口増加を支えきれない従来型の自然環境に制約された産業の限界、③17世紀後半から18世紀に東西ユーラシアで頻発した飢饉の問題...社会的な有用性をもった（市場価値の高い）資源と技術の探索が必要
- ・【日本】「華夷変態」以後の東アジアにおける政情の安定と社会に有用な実用的な知識の必要→江戸幕府の漢訳洋書の輸入緩和（1720）や各藩における救荒作物や特産品の開発→「蘭学」の発展を刺激 cf. テューンバリによる梅毒治療法の紹介
- ・【ヨーロッパ】ヨーロッパ諸国における科学アカデミーや特権商事会社の資源探索と博物学の素養をもったプラントハンターの雇用→科学アカデミーや特権商事会社は「公共善」の保全を使命とする君主の承認によって創設 eg. スウェーデン王立科学アカデミーの創設（1739年）「祖国に奉仕する...人びとのための学問の探求」（Kungl. Vetenskapsakademiens Handlingar, vol.1, 1739より）「その創設は実用的で経済的な知識を促進することにあった」（G. Eriksson & T. Frängsmyr, *Idéhistoriens huvudlinjer* (Stockholm, 2004) より) cf. テューンバリによる日本の農業への評価

【参考文献】金澤周作監修『論点・西洋史学』（ミネルヴァ書房、2020年）

	スウェーデン	日本	スウェーデンの飢饉	日本の飢饉
1600年	約70万人	約1937万人	凶作（1596-98）	元和3年の飢饉（1619）、寛永の大飢饉（1642-43）
1650年	約110万人	約2365万人	凶作（1678） 凶作と飢饉（1696-97）	延宝の飢饉（1674-75）、天和の飢饉（1682-83）、元禄の飢饉（1691-95）
1700年	約137万人	約2888万人	凶作（1708-09） 凶作と飢饉（1725）	享保の大飢饉（1732）
1750年	約177万人	約3110万人	凶作（1746） 凶作と飢饉（1770-73） 大飢饉（1783-84）	天明の大飢饉（1782-87）
1800年	約235万人	約3120万人		

スウェーデンと日本の人口推計と主な凶作・飢饉（cf.スウェーデンは1749年以降、日本は1721年以降人口調査が実施されている）人口については鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』（講談社、2000年）、浜野潔『歴史人口学で読む江戸日本』（吉川弘文館、2011年）、スウェーデン統計局（Statistiska centralbyrån）が公開している人口統計などを参考に作成

余談：東西ユーラシアを結んだラクリスの物語：18世紀の日本が求めた実用的な知識

- ・「ラクリス」を知っていますか？...マメ科の多年生草本である甘草はアジアでは粉末にした生薬として、欧米では抽出液を甘味料として利用してきた（cf. フィンランドの「サルミアッキ」...塩化アンモニウムで増粘、味付けされたラクリス（「世界で一番不味い菓子」））
- ・チューンバリが伝えた水銀水（昇汞水（スウィーテン水）による梅毒治療法...昇汞（塩化水銀）、蒸留酒、甘草由来のシロップからなる
- ・オランダ通詞吉雄耕牛（1724-1800）へ伝授...吉雄流医術の秘術として伝承 cf. 『紅毛秘事記』（ヨツブルキ人バロンハンスーイテント云人アリ.....今カレルヒイトインベルゲト云、本草ニ精キドクトール医師長崎へ来リ此方ノ効アル事ヲ伝フナリ）
- ・ゲラルド・ファン・スウィーテン（1700-72、オランダ出身の医師、マリア・テレジアの侍医としてオーストリアで活躍）による駆毒法...Kurze Beschreibung und Heilungsart der Krankheiten in dem Feldlager（軍営地に良く見られる病気の概説と治療法）（1758）→チューンバリが日本へ紹介
- ・穀類の食物繊維と牛乳の蛋白で塩化水銀の急激な吸収を抑制→ラクリス由来の甘味のある多糖類のとりみでくわえて血中の水銀濃度の上昇を抑制する方法を伝授

【参考文献】W.ミヒェル、鳥井裕美子、川島真人編『九州の蘭学—越境と交流』（思文閣出版、2009年）

Kurze Beschreibung und Heilungsart der Krankheiten, welche am öftesten in dem Feldlager beobachtet werden.



Mit Ihro Königl. Majestät allergnädigstem Privilegio,
Wien, Prag und Triest,
gedruckt und zu finden bey Joh. Thomas Trattner,
Kais. Königl. Hofbuchdruckern und Buchhändlern,
1758.

160 Von der Venusseuche.

kann solche Krankheit sehr hart geheilet werden, und obwohlen sie zu Zeiten geheilet zu seyn scheint, bricht sie dennoch wiederum ohne Ursach von neuem aus.

Dergleichen Zufälle machen, daß man diese Krankheit leicht erkenne.

Die Cur wird auf solche Weis sicher, und glücklich vorgenommen:

Der Patient muß frühe, und Abends, einen Eßfel voll von N. 66. einnehmen, und allezeit ein Pfund gekochtes Gerstenwasser, wozu der dritte Theil süße Milch vermischt worden, darauf trinken: das gekochte Gerstenwasser mit Milch kann auch der Patient unter Tags an statt des gemeinen Getranks trinken. Sollte aber die Milch hart zu bekommen seyn, kann man das Getränk N. 67. gebrauchen.

Die Patienten empfinden von diesem Arzney gar keine Ueberläßigkeit. Einigen macht

「患者は早朝と夕方に匙一杯の処方 66 に記した薬を服用し…燕麦の粥に三分の一量の新鮮な牛乳を加えたものを与える。このミルク粥を日常の飲み物の代りに飲むと良い。牛乳の入手が難しい場合には、処方67 を使ってもよい。」

65. Nimm Weersolk-Geist
1. Quintel,
Rosen-Sönig
1 1/2 Unzen,
gemeines Brunn-Wasser
5. Unzen,
mische es unter einander.
66. Nimm corrosivischen
Sublimat 12. Gran,
starcken Korn-Brandwein
2. Pfund,
misch, und laß es in ei-
ner reinen und zugemach-
ten gläsernen Phiolen ste-
hen,
65. R. Sp. Salis Marini
dr. j.
Mell. Rosar.
Unc. j. 1/2.
Aq. communis
Unc. v.
m.
R. Mercurii subli- b.
mati corrosivi
gran. xij.
Spir. frumenti se-
mel rectificati 1/2 ij.
In Phiala vitrea pu-
ra clausa serventur,

hen, bis der corrosivische
Sublimat gänzlich aufge-
löst ist.
67. Nimm Eibisch-Wurze
2. Unzen,
laß in genugsamer Menge
Wasser eine Stunde sie-
den, zulezt gieß darzu
abgeschältes Süßholz
1. Unzen,
hernach seige es ab, und
das Ueberbleibsel
gieß zum Gebrauch.
197
donc Mercure sublim
sponte se jature.
67. R. Rad. Althææ
Unc. ij.
Bulliant in f. q. Aq.
communis per horam,
sub finem addendo
Glycirhiz. rasæ
Unc. j.
colat. 1/2 iv. exhibet.

「66 昇汞12グレイン（0.78g）、蒸留酒2ポンド（746g）両者を清潔なガラス容器で混合し、昇汞が完全に溶解するまで置く。67 ウスベニアオイの根2オンス（62.2g）大量の水で一時間煮沸する。最後に皮をむいた甘草の根1オンス（31.1g）を加えて4ポンド（1492g）まで煮詰めたら、固形物を除く。」

この講義をまとめよう②：西洋史と 日本史を結ぶエティックな視線の僕 流の求め方ー関係・イーミック・比較ー

- ・【ステップ①】東西ユーラシアの「関係」を見いだす...この講義では「18世紀スウェーデンの学術活動とは？」→スウェーデンで博物学を学び、オランダ東インド会社に雇われた学者の事績から東西ユーラシアの「媒介者」としてのスウェーデンの役割を紹介→18世紀に生きた人びとの活動そのものに着目することで、「鎖国」のような概念に長らく隠蔽された東西ユーラシアの「関係」の実態を明らかにできる（→近代以降の「主権」「領域」「国籍」などの概念から自分を解放する必要がある）
- ・【ステップ②】イーミックな観点からヨーロッパないしは日本の個別事情を深掘りする...この講義では「リンネ博物学がスウェーデンで育まれた背景とは？」→東西ユーラシアの「媒介者」となり得たスウェーデンの歴史的な事情を紹介（...それは領域国家などの近代以降の考え方を前倒ししては理解できない事情である）→この講義ではスウェーデンを中心に議論したが、各々の文明圏の個性を探るイーミックな視線は、東西ユーラシアの「関係」を実現させたスウェーデン側（あるいは日本側）の背景を深掘りする上で必要である
- ・【ステップ③】東西ユーラシアの「比較」を試みる...この講義では「リンネ博物学が東西ユーラシアで求められた事情とは？」→ヨーロッパ側・日本側（...日本側についてはステップ②にあるイーミックな視点からの探求が今後の課題として残されているが...）を比較→「比較」の前提として、①の「関係」を実現させた各々の文明圏の個性をイーミックな観点から明らかにしておくと言説力が増す＝関係と比較に着目するとエティックな視線による「単数形の近世（西洋史と日本史を結ぶ近世）」が見えてくるが、エティックな視線は「各文明圏に独特な複数形の近世」を見いだすイーミックな視線によって補完される

秋田茂・桃木至朗 編著

日本史と世界史のあいだでー

グローバルヒストリーから考える
新しい大学歴史教育



HANDAI
Live

072

大阪大学出版会